



TITLE:

東亞天文協會觀測部月報

AUTHOR(S):

CITATION:

東亞天文協會觀測部月報. 天界 1941, 21(238): 130-134

ISSUE DATE:

1941-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168148>

RIGHT:

観測部月報

Monthly Report, Observing Section, O. A. A.

★

東亞天文協會

★流星課報告 Meteors (112)

課長 小槇孝二郎 K. Komaki

漸く寒さから解放されるので、四月はずつと観測が楽になる。本月中の注意すべき流星群は、

期 日	輻射點	附近の星	備 考
上旬～中旬	$\alpha=210^\circ \delta=-10^\circ$	乙女 κ	火 球
20～24日頃	270 +33	琴 κ	顯著、輻射點移動
30日頃	291 +59	龍 δ	稍 緩

上記の中、最も顯著なのは琴座流星群である。本年は四月18日が下弦なので、流星の最盛期は月光にあまり邪魔されない。この流星群は、最近年、観測数が少いのであるが、今年は特に課員の奮闘を希望する。

× × × × ×

昨年末から本年初にかけて、かねての計畫によつて、四分儀流星群を観測されたのは、川人武正 Kw (香川県観音寺町)、古屋二郎 Hy (甲府市)、富田弘一郎 Tm (東京市) 及筆者 (Ko) である。其の概略は下記の通り

月 日	觀測者	觀測開始	觀測終了	時間數	Factor	流星數 ↓	四分儀群Q
1940年 十二月30日	Kw	4 ^h 0 ^m ~ 6 ^h 0 ^m	120 ^m	0.9	2	1	
Dec. 31	"	4 0	6 0	120	0.9	3+*1	2
"	Tm	5 0	6 0	60		6	0
1941年 一月1日	Kw	4 0	6 0	120	0.7	2	1
Jan. 2	Tm	5 0	6 0	60		20	1
4	Ko	4 10	4 40	30	0.2	6+*1	4
"	Tm	4 0	6 0	120		54+*17	15<
"	Hy	5 30	5 50	20	0.7	8	4
5	Ko	3 22	5 52	150	0.95	41+*10	6
"	Kw	4 0	6 0	120	0.9	9	1
"	Hy	4 15	5 30	75	0.7	9	3
6	Tm	5 0	6 0	60		15	3

* 星圖に記録なきもの Not recorded.

上記の如く、極大の4日は關西は特に天候が悪かつた爲、出現状態を明瞭に捕へられなかつたが、Tm 及 Hy 兩氏の結果から見て、例年並の出現であつた事が想像される。(昭和16年二月1日)

★黄道光課 Zodiacal Lights.

瀬戸の本田實氏より去る十二月20日と同21日(3回)との夕刻の黄道光、東京の富田弘一郎氏より一月13日の夕刻の黄道光、静岡の大石辰次氏より一月16日、17日、21日、26日、29日の夕刻の黄道光の觀測報告を受けた。昨年と違つて、今年は金星が觀測を妨げないので、課員諸氏の觀測も見事であるが、二月から以後は、その代りに、木星と土星との光りが多少の妨害となることと思ふ。

一般に此の頃のやうに、太陽の黒點が極大期を過ぎて、下り坂に向ふと、薄明の光りの亂れがおさまり、黄道光としては標準型の、正しい形ちのものが現はれて來るのが定石である。之れは過去30ケ年にわたる筆者の觀測による経験であるが、課員の諸氏も、同様な觀察をしてゐられるや、否や?

尙ほ、課員諸氏に願ひたいことは、黄道光と薄明光との區別を明瞭に見分ける練習をして貰ひたい。一口に言へば、薄明の光りは、地球の大氣の放つ光であるから、地平線に近づくほど其の光りは強い。之に反して、黄道光は、地球以外の遠い天體からやつて來る光りだから、地平に近いあたりでは、大氣のために衰光 (Extinction) の影響を著しく受けて、最下部の光りが消える。其のため、模範的な黄道光の等光線は上下に延びた楕圓形となり、特に下部が圓く縮まつてしまふものである。ところが、薄明の光の等光線は下部が左右に廣く開いて、富士山の形のやうになるものである。尤も、之れは、他に何も妨害の光が無い場合の標準型であつて、實際は、必ずしも常に此のやうな美しい區別が現はれると限らない。——この點が非常に興味のある點であつて、つまり、黄道光と薄明光とを巧みに區別し、毎日々々の薄明光の變動を鋭敏に感得すれば、此の方面から、地球の大氣の其の日々々の模様が知れて來て、いろいろ多方面の應用が可能となるものである。觀測者の奮勵を望む所以である。

醍醐氏よりの“月の散光”の報告を載せる。(山本)

月の散光現象は、ごく短時間内(月出前、約30分以内)に觀られる光象でして、スケツチの出來得る程度に明瞭となつて來るのは、20分ぐらひ前です。特に上記の時刻附近が第2光象を見究めるに良い時刻です。第1光象部は主に大氣による散光ではないかと思はれます。……月の出現後も、月を何かの前方の障害物によつて遮ぎつて觀測すると、良く觀られます。尙、此れは月の高度が益すと共に、くづれて行きます。

月出前、此の第1光象部が明るさを益すと共に、第2光象部は次第に薄れ淡まり、消失して行きます。

明るさには、普通、銀河の2~3倍程度で、第2光象部は、第1光象部の $\frac{1}{2}$ 、又は $\frac{1}{3}$ 程度であります。

高度が低く、非常に不明瞭で、且、又、短時間でもありますし、回数(観測)も微かですので、十分なるものではないと存じますが、以上、甚だ不備ながら報告致します。

昭和16年一月16日

醒 醐 正

★ 彗 星 課 Comets

ベルリンのナハリヒテン誌 B. Z. (観測回報)によれば、目下次の彗星の決定的軌道の計算が行はれてゐる。

1919V	(Metcalf)	J. Witkowski
1924IV	(Wolf) [1925I]	S. Kanda 神田 茂
1929II	(Fordes)	Makarow
1930V	(Forbes)	E. Senftl
1930VI	(Schwassmann-Wachmann)	W. Parfenow
1932I	(Houghton-Ensor)	Kostyczyn
1932VII	(Newman)	Astron. Institut Leningrad
1936III	(Kaho-Kozik-Lis)	Astafov
1936IV	(Jackson-Neujmin)	L. E. Cunningham
1937V	(Finsler)	P. Muzen
1939a	(Kozik-Peltier)	A. Przybylski
1939b	(Väisälä)	L. Oterma
1939d	(Jurlof-Achmarof-Hassel)	M. Bielicki
1939h	(Rigollet)	T. Watanabe 渡邊敏夫
1940c	(Cunningham)	L. E. Cunningham

尚ほ、下記の彗星は軌道計算擔當者が未だ定まつてゐない。

1911IV	(Beljowsky)	1926III	(Ensor)
1912III	(Borrelly)	1926VII	(Reid)
1913I	(Lowe)	1927II	(Blathwayt)
1914I	(Zlatinsky)	1927IX	(Skjellerup-Maristany)
1914II	(Kritzinger)	1929III	(Neujmin)
1914IV	(Campbell)	1930III	(Wilk)
1915IV	(Mellish)	1930IV	(Beyer)
1917II	(Schaumasse)	1931IV	(Ryves)
1918II	(Reid)	1931V	(Carrasco)
1920I	(Skjellerup)	1932V	(Peltier-Whipple)
1920III	(Skjellerup)	1933I	(Peltier)
1921V	(Reid)	1934II	(Jackson)
1923I	(Skjellerup)	1936I	(Van Biesbroeck)
1924II	(Finsler)	1936V	(Hubble)
1925III	(Reid) [1925IV]	1937II	(Wilk)
1925VI	(Shajn-Comas Solá) [1925 VII]	1937IV	(Whipple)
1926I	(Blathwayt)		

Die für das Jahr 1925 abweichende definitive Bezeichnung der Kometen von A. S. Yamamoto ist in eckigen Klammern beigelegt. Falls inzwischen Änderungen eingetreten sind, wird um möglichst umgehende Mitteilung gebeten.

上の表(二つ共)のうち、1925年度の番號で、[] で圍んだものは山本達氏著
“彗星總目錄”中の番號である。

Astronomische Nachrichten
Berlin-Dahlem, Altensteinstrasse 40

昨年末以來、彗星の往來が非常に頻繁で、殊にカニンガム星といひ、パラスケツプ1ロス星といひ、光輝や尾の立派なものが、空を賑はしてゐる。それに尙ほ、今年は、近く、エンケ星や、第二テムペル星も来る筈だし、第一シヴスマン星も近日點を通過する筈であるから、見える彗星の總數は、レコードを破るほど多く無いかも知れないけれど、彗星界一般は活氣に富んでゐる。

年末、カニンガム彗星の來襲によつて俄然沸騰した世界の彗星界は、今年になつて、一月中に早くも三つの彗星を迎へることとなつた。即ち、

- | | | |
|-------|-------------|--|
| 1941a | フレンド・本田彗星 | { 一月17日 C. L. Friend 氏發見
同 21日 本田實氏發見 |
| 1941b | エンケ彗星 | 一月19日 G. van Biesbroeck 博士發見, 17等級 |
| 1941c | パラスケツプ1ロス彗星 | { 一月24日(?) Paraskevopoulos 博士發見
二月 3日 本田實氏再發見 |

それに尙ほ、第一シヴスマン・ワハマンも、既に昨1940年七月4日に東京の廣瀨氏によつて觀測された。位置豫報は急報を見て貰ひたい。

a 星を發見したフレンド氏は加州 Escondido 村の人で、岡林氏の言によれば、今回の發見を満月後の3日目にやつてゐる所から見ると、彼れも彗星捜しをやつてゐる人らしい。此のエスコンディド村は、パロマ山天文臺に近い所で、天界229號210頁の地圖に出てゐるから、御覽願ひたい。

エンケ星は、今は未だ16~17等級であるから、小望遠鏡ではとても觀測出来ないが、三月末から四月初になればウンと明るくなる。神田氏は之れが四月には5等級になると豫想してゐるが、ポーランドの Matkiewicz 氏は8等級と豫報してゐる。果して、どちらが當るか？

パラスケツプ1ロス博士がc星を發見したのは何日であるか、未だ不明である。博士は南阿ハバード天文臺出張所長として、恒星の寫眞を撮影をしてゐる人であるから、彗星の事は南米コルドバ天文臺に委託したものと見えるが、コルドバの24日の觀測はハバードのシャプリ教授から發信してゐるから、最初の發見は22~23日頃に行はれたものではないか？ とにかく、この星は諸君御承知の如く、スバラシイものになつたものだ。近日點距離は0.8單位であるといふのに10'に近い尾が現はれたりして、實に驚くべき星となつて了つた。今後、この星は急激に遠さかるが、尙ほ、2~3ヶ月は觀測し得られるであらう。位置は羊座あたりで、好都合な所にある。彗星往來の頻繁な折柄、拙著“彗星總目錄”(英文)の餘分が少々ありますから、希望者には實費で御わかちします。往復ハガキで本會事務局に申し出て下さい。(進)

太陽黑點相對數報告 Sun-spot Relative Nos. (1941年1月)

觀測者 Obs. (觀測地)	蔡章獻 (臺北市)	坂上務 (鹿兒島市)	津留繁雄 (熊本市)	廣瀨辨三 (廣島市)	本田實 (瀨戶觀測所)	竹內潤 (大阪市)	樋口操 (大阪市)	木村直樹 (和歌山市)	木邊成磨 (滋賀縣)	正村一忠 (岐阜市)	前橋榮太郎 (大阪市)	金田伊三吉 (石川縣)	大石辰次 (靜岡縣)	香掛七二 (長野縣)	古屋四郎 (甲府市)	堀田泰生 (橫濱市)	阿部正明 (東京市)	保積善太郎 (東京市)	富田弘一郎 (東京市)	江川義 (千葉縣)	高橋利繁 (北海道)
口徑 mm	55	42	130	58	75	32	25	12.5	75	90	25	30	55	102	32	20	28	75	40	30	33
倍率 ×	64	64	48	50	60	50	50	80	60	22	54	53	64	75	44	50	45	44	32	30	35
方法	P	P	P	D	D	D	D	P D	D	P	P	P D	D	P D	D	D P	P	D	D	D	D
1	88	C		M	49	26	44	29	67	49	44	44	35	52	51	M	48	46		M	25
2	89	R		"	R	C	29		C	M	M	48	31	68	62	"	68	79		36	
3	81	62		"	C	R			72	64	"	55	55	69	63	65	56	55		35	
4	88	C		"	"	C		44	M	66	"	54	35	81	54	67	67	75		44	
5	102	59		"	76	54	50	38	"	94	77	60	73	86	65	M	100			56	
6	96	R		"	44	M		48	52	80	52	55	51	94	82	72	"	142		50	49
7	R	C		"	C	R			R	R	M	45	C	C	C	C	R	S		72	
8	"	M	90	"	61	103		58	M	81	"	55	"	66	87	"	"	C			
9	"	C	61	"	C	R			"	57	"	63	57	C	C	69	M	63			
10	"	38		50	43	40			42	C	54	47	C	"	"	C	R	38	38		57
11	"	C		67	42	R			39	58	27	61	48	"	38	M	57	51	41	51	
12	"	36		35	23	12			41	C	M	35	35	"	39	40	M	34	39	36	
13	"	C		M	23				22	33	24	23	36	"	13	22	35	22	36	33	
14	C	23	25	36	11				36	35	12	11	27	38	12	M	M	19	27	35	
15	11	22	23		C				27	11	11	11	23	C	M	"	11	2	26	11	
16	R	23			11				22	22	11	11	11	"	12	"	M	2	25		
17	"	23		22	22				M	22	22	22	22	"	13	"	"	6	26	22	
18	"	22	22		22	22			"	22	22	22	23	M	14	"	"	6	43	22	
19	R	C			C				"	C	12	22	11	"	13	11	"	2	30	12	
20	30	C			24				S	M	68	39	25	"	14	32	"	20	C		
21	34	39		33	32				28	"	M	34	25	"	50	M	"	80	52		
22	51	R			C				M	"	"	46	51	"	53	"	"	48	75	62	
23	R	C		46	"				55	42	"	27	C	"	61	R	M	98	C		
24	"	"		43	"				C	R	"	24	R	"	R	C	"	89	"		
25	C	M			50			38	M	52	39	23	36	"	49	"	S	36	"		
26	80	66		62	C				69	S	44	22	54	"	60	55	M	65	73	39	
27	57	C		"				30	M	M	M	S	64	"	M	M	"	107	83		
28	137	"		69	51			30	82	72	73	70	51	C	"	70	"	115	87	44	
29	C	R		87	89			59	R	72	69	66	C	"	"	C	C	92	C		
30	R	C		79	94				M	90	60	92	83	"	"	110	M	117	51		
31	"	S		97	C				110	70	77	S	78	"	97	M	"	139	49		87
日數	14	11	4	14	18	5	3	9	15	20	19	29	25	8	22	11	8	29	17	15	5
平均	69	38		53	43	47		42	60	55		44	42	69	44	56	49	61	47	35	58
前月 平均	84	76	50	44		71		65		64		54	71	74	52	73	73	75		60	

注意 N.B. : P=投影 Projectio; D=直視 Direct visual observation; C=曇 Cloud; R=雨 Rain; S=雪 Snow; M=缺測 Missed.